

千秀だより

横浜市立千秀小学校

9月号

平成25年(2013). 8. 27



記録と記憶

校長 市川 幸男

40日に及ぶ夏休みが終了し、学校に元気な子ども達が戻ってまいりました。この長い休み中に、それぞれの子ども達には多くの学びがあったことと思います。栄区の水泳大会に向け頑張った子、家のお手伝いを頑張った子、あるいは自分たちの郷土とは違った遠隔の地に行き、そこで多くの経験をしてきた子など、みんなそれぞれの宝物となるものがあったことなのでしょう。そういった普段の学校生活では学ぶことのできない経験を、是非これからの生活の中に生かして行ってほしいと思います。

さて、夏休み中に親しくしている人から、こんなお話を耳にする機会がありましたのでご紹介致します。それは京都の五山の送り火でのお話です。京都の送り火は「大文字焼き」とも言われ、日本で一番有名なお盆行事ともいわれています。その方は、この行事を見物することをとても楽しみにしており、京都御所の一廊でその時を待っていたのだそうです。そこは、送り火見学の隠れた名所でもあり、点火時刻になると多くの人が集まり、人いきれでごった返す状態となりました。それでも、都会の花火大会で見られるような押し合いや喧噪があるわけでもなく、集まってきた人々は整然とその場に座り、静かに点火の時を待つという落ち着いた装いでした。さすがに千年の都人と感心したそうです。いよいよ点火の時が来て、大の字の最初の横棒に灯がともし始めたときの事です。見物席から一斉にフラッシュがたかれ、中にはビデオで撮影されるのでしょうか、ライトが点灯されるなど、しばらくの間、記者会見場のような光の洪水の様相となり、真昼のように明るくなったそうです。大文字焼き自体はとても幽玄であり、趣深く楽しめたのですが、何か自分の周りの人々の姿に幻滅し、寂然としない気持ちでホテルへの帰途についたとのことでした。「なぜ、自分の目で見ようとししないのだろうか。」「ファインダー越しに見るのではなく、送り火の味わい心に刻むことは大切ではないのだろうか。」といった思いが残ったそうです。

この話を聞いた時、私は、学校での様子を思い浮かべざるを得ませんでした。運動会や各種発表会はもちろんのこと、授業参観の際もカメラや携帯電話を掲げる方を見かけます。そこにはすぐに見られるデジタル式のカメラや、カメラ付き携帯電話、スマートフォンなどが普及し、写真や動画を撮影することが、大変身近となったという現在の社会性があるのでしょうか。でも、我が子の成長をカメラに納めるその姿をみていると、微笑ましいと同時に、何か今ひとつ寂然としない感情が残ります。もともとカメラは記録を刷る道具です。現在のようにカメラやビデオが普及する前はどのようにしていたでしょう。子どもの一つ一つの動きを、じっと見つめ、記憶にとどめていたのではないのでしょうか。そして、子どもの活躍に一喜一憂し、子どもと親とが同じ時間、同じ思いを共有できていたのではないのでしょうか。もちろん、こう書いてからと云って、子どもの成長の姿を写真に残していくことを否定するものではありません。それどころか、自分でもそうしてきた経緯があります。記録映像は、参加できなかった人にその様子を具体的に伝えることもできます。仕事柄、なかなか自分の子どもの学校行事等へ参加できなかった私が、子どもの学校での様子を知るのに、大いに助けられたものでした。記録することと記憶すること、どちらも大切なものと意識し、ないがしろにすることなくバランスよく対応していければと思います。大文字焼きのお話からそんなことを考えました。

夏休みが終わり、これから日常の学校生活が始まります。授業はもちろんのこと、体験学習や修学旅行等の宿泊行事も含めまして、よき思い出として子どもたちの記憶に残るようなものにしていきたいと存じます。皆様のご協力宜しくお願い致します。